

泣かせてあげるっ

## 目次

泣かせてあげるっ

5

番外編

誰が何と言おうと、  
僕はあなたのそばを離れない。  
だってそう決めたから。

271

泣かせてあげるっ

1 僕のものになってください。

彼女は薄いカーテン越しに照りつける日差しに呻きつつ、ごろりと寝返りを打った。そして指先に触れたモノに抱きつく。それはいつもの抱き枕……のはずだったのに。

こ、これは一体……!!

彼女、萩原朱里は、愛用の抱き枕に抱きついたはずだった。けれどただ柔らかいだけの抱き枕とは違う何やら温かいもの——というかおそろく人間——に逆に抱き寄せられた。

混乱して目を開けることもできないまま、フリーズする。

ガンガンと二日酔いに痛む頭で、必死に抜け落ちた昨夜の記憶を探ってみる。けれど悲しいくらいに思い出せない。

恐る恐る目を開けてみれば、視界に飛び込んできたのは一面の肌色。丸みや柔らかさどころか、贅肉もない引き締まった胸板。同性ではなさそう、というか……間違いなく男。

で、その男性に朱里は絶賛抱きしめられ中で、更には二人とも真っ裸。下着ひとつ身につけていない。なにがあったのか想像するのは簡単すぎる。

——これはもしかや、ドラマなんかでよく見かけるシチュエーションじゃない……？ 酔っ払った

勢いで、ナニしちゃったとかいう……

そう理解する以外あり得ない状況に、朱里は二日酔いとは別の意味で頭が痛くなった。

確かにあまり酒癖のいい方ではないとの自覚はある。けれど、知らない誰かと裸のままベッドの上で抱き合っているなんて失態は演じたことがない。まさか二十七歳にもなって、こんな体験をするとは思いもしなかった。

ところでここ、私の部屋だよね……？

焦りながらもぐるりと見渡し、自室であることに一瞬ほっとする。けれど。

いやいや!! ほっとしてる場合じゃないでしょう!? 私の部屋ってことは、さっさと服着て逃げ出すこともできないじゃないの!!

そのことに気が付いて、今度は一気に青ざめた。

「……………」

途端、頭上から堪え切れないというようなかすかな笑い声。反射的に顔を上げれば、その声の主と——自分を抱く裸の男とばっちり目が合った。

——刹那、呼吸が止まる。

見上げた先の男の顔は、それはもう、思わず見惚れてしまうくらい整ったものだったから。少しだけ垂れた大きな瞳は長いまつ毛に縁取られ、程よく通った鼻梁の下唇は少しかだけ肉厚。くすくすと笑うその顔は、どちらかといえば可愛らしいという表現がしっくりくる。

「おはようございます。朱里さん」

突然と口を半開きにして見上げていた朱里の額に、彼はちゅつと軽くキスをする。そのキスではつと我に返った朱里は、男の胸を両腕で突っぱねた。

「わっ、あの!!」

動揺して体を離してしまったことで、色んなところが丸見えになっているのにも気が付かず、更には彼が「朱里さん」と親しげな呼び方をしたのにも気が付かず、とにかく朱里はマシガンのごとく言い訳した。

「ごめんなさいっ!! 私、何も覚えていないの。頭なんてすっごく痛いし、きつと昨日は相当飲んじゃったのね。それでね、本当に申し訳ないんだけど、昨日の夜に何があったとか、あなたが誰なのかとか、全く、一切、綺麗さっぱり分からないの。なんにも覚えてないのっ」

その言い訳に、じつと朱里を見つめていた男の目が不機嫌そうに細められる。

「なにも、覚えてない? 僕のこと、分かりませんか?」

「は、はい……ごめんなさい。全然分かりません」

素直に頭を下げれば、がしつと両肩を掴まれてがくがくと揺さぶられた。

「分からないって本気ですか!? 自慢じゃないですが、大体一回で覚えてもらえる顔なんです。ほら、ちゃんと、よく見てくださいよ!!」

予想もしていなかった彼の反応に、朱里は素直にその顔をまじまじと見つめた。

まだ機能しきっていない脳細胞を叩き起こし、必死に記憶を掘り起こす。確かにこんなに整った顔は、そうそう忘れようがない。

そう、こんなに整った顔……は?

「っ!! う、うわああああああ!!」

思わず上げた大声に、二日酔いの頭がひどく痛んだ。けれど、そんなこと構ってられない。

だって、そうだ。確かに朱里はこの整った顔の男を知っていた。

そして自分の記憶が正しいなら、見知らぬ男と一夜を共にした方がよっぽどまじと言える相手だったのだ。まじどころか、その方が断然よかったと断言できる。

「思い出してもらえましたか?」

不機嫌そのものだった彼の顔がぱつと輝き、子犬のような人懐っこい笑みが浮かぶ。

「せ、瀬田、葵……!!」

震える声でその名を口にする、彼——瀬田葵は嬉しそうに勢い良くうなずき、ぎゅうぎゅうと朱里を抱きしめた。どさくさに紛れて今度は頬にキスされる。

「いつ、いやあああああつ、や、やめなさい!! 離れなさい!! てか、離れろー!!」

「別がいいじゃないですか。昨日はもつとすごいことを朱里さんの体にしてむぐっ」

穴を掘って埋まりたくなるような言葉を吐きかけた口を強引に両手で塞ぎ、朱里は顔を引きつらせて葵を睨みつけた。

「いいわけないでしょう……!! だって、だってあんたは……!!」

そう叫ぶと同時に、朱里の記憶は一気に昨日まで遡ったのだった。

そう、それはつい昨日の朝のこと。

朱里の勤める総合病院が、各病棟に新人看護師を迎えるということで、どこかそわそわした空気に包まれていたそんな朝。

上司である外科病棟の看護師長、元村に呼び止められたのが始まりだった。

「萩原、お願いよ。新人の指導係を引き受けてちょうだい」

「は、はあ？」

師長からの突然の頼みごとに、朱里は素っ頓狂な声を上げてしまった。

朱里が所属するこの外科病棟では、自分の技術や知識の振り返りも兼ねて、勤め始めて二〜三年目の看護師が新人の指導係を担当する。だから看護師歴が八年目にもなる朱里は対象外のはずだ。この病院に、勤めてから、という意味であれば三年目なので当てはまるのだけれど。

「萩原の言いたいことは分かっている。でもね、どうしても指導係の人数が足りないの。萩原に安心して新人を任せられるし……ここは私を助けると思っ引き受けてくれない？ あなたなら先輩からの信頼も厚いし適任だわ!! お願い!!」

がしっと手を握られ、真っ直ぐにうるうる見つめられれば、朱里に断れるはずもなく。

——人がいいよね。

そんなセリフを今まで何度かけられたか知れない。

自分でもお人好しなことは、嫌になるほど分かっている。頼られるとどうしても断れない性分なのだ。そのせいで何度も貧乏くじを引いたというのに。

穴が開きそうなほどじいっと見つめられ、朱里はため息をつきつつ観念した。

「……分かりました。お引き受けします」

朱里の言葉に元村師長は大袈裟に感謝の言葉を並べ立て、最後にふとこんなことを言った。

「そういえば萩原、あなたって年下のイケメンと年上の渋い男、どっちが好き？」

「……は？ そりゃあ年上の渋い男、ですが？」

「そう!! そうよね。私の見込み通りだわ」

元村師長の謎の言葉に首を傾げつつ、朱里はこうして新人指導を引き受けたのだった。

そして数分後、師長の謎の言葉の真意を知ることとなる。

「初めまして、瀬田葵です。よろしくお願います」

「瀬田君の担当は彼女ね、萩原朱里さん」

師長に連れられてやってきた新人看護師たちが、それぞれ紹介されて短い挨拶をする。その中の一人である瀬田葵を見て、日勤の看護師も、夜勤でぼろぼろに疲れ果てているはずの看護師も色めき立っていた。

「よろしくお願います、朱里さん」

「……よろしく」

なんだこいつ、初対面で「朱里さん」とか馴れ馴れしい……

と喉まで出かかった言葉も、その顔にっこりされたとたん、しゆるしゆる萎んで消えてしまう。

他の看護師たちが羨ましそうに朱里と葵を交互に見る視線が痛い。

別に好き好んで指導係になったわけじゃないんだから、と内心でぶつぶつ愚痴りながら、朱里はそこでやっとさっきの師長の言葉の意味を悟った。

そう、師長が朱里に指導係を頼んできたのは、この瀬田葵のルックスが原因に違いないのだ。さっき答えた通り、朱里は年下にもイケメンにも興味はない。年下より年上。イケメンより渋さを求めている。とはいえ審美眼は特に狂っていないので、葵のルックスが飛びぬけて優れていることはよく分かる。

垂れ気味な大きな二重の目はどこか可愛らしくもあり、少しだけ肉厚な唇は妙に色っぽい。白衣の立ち姿なんて、ドラマのワンシーンかと思ってしまうほど決まっている。

指導する側とされる側は、とにかく一緒に行動する機会が多い。シフトもほぼ一緒だ。年の近い看護師だと恋愛関係に発展して、指導どころではなくなることが容易に想像できるし、師長がそれを心配する気持ちも分かる。

けれど朱里ならば、「この病院に“勤めて三年目”という上手い理由もつけて指名できる上に、年下にもイケメンにも興味がないときている。更には今年で二十八になる朱里と新卒の葵とでは、ある程度年の差もあり安心だと踏んだのだろう。

なんだか面倒くさいことを押し付けられた気がする……  
と、朱里は引きうけてしまったのを早くも後悔していた。

その後は師長が新人に病棟の案内などを始めたので、ほとんど葵と接することなく仕事を終え、それから当日の夜の新人歓迎会に行つて、それから……それから？

そこら辺の記憶があまりないけれど、そんなこんなで現在に至る。

抱き寄せてくる葵を必死で押しつけようとする朱里と、彼女を長い腕に絡め取つて離そうとしない葵の攻防。

「わっ、私はあなたの指導係なの!! だからこういうのはまずいんだつてば!!」

離すどころか、馬乗りの体勢になってキスしようと顔を近づけてくる葵の顎を掴んで、朱里は必死の抵抗を続ける。

「まずい? 何がですか? 別にいいじゃないですか」

「大体にして、何がどうしてこんなことになってるのよ!!」

迫ってくる葵を、なりふり構わず片足で蹴るようにして押し退ける。さっきとは比較にならないほど色んなところが丸見えになっているけれど、知ったことじゃない。

「どうしてって、それは意気投合して、お互いに同意の上でやっちゃったからでしょう?」

「う、うわああ!! そっ、そういうことははっきり口にするな!! 大体、私とあなたは昨日の朝会ったばかりじゃない!!」

ふと迫ってくる葵の力が抜けた。朱里は慌てて彼の下から這い出し、タオルケットを体に巻きつける。

ここにきてようやく、さっきまで自分がどれだけ恥ずかしい恰好をしていたかに思い至り、急に頬が熱くなってきた。ぱたぱたと手の平で顔を扇いでいると、突然視界が反転した。

「……な!!」

両肩を掴むようにして押し倒されたのだと気が付いたのは、視界いっぱい葵の顔の向こうに、見慣れた天井が見えたから。

「ちよ、やめなさい」

「……朱里さん、確認です。僕は誰ですか？」

切羽詰まったような顔に、低い声。大きな目を鋭く細め朱里に迫ってくるその顔は、彼が年下だということも忘れてしまいそうなほど厳しいものだった。

「誰、ですか？」

「そ、の、き、昨日ウチの病棟に配属された新人の……瀬田」

で、間違いないはずだ。

けれど朱里の答えに、葵はぎりつと音が聞こえるほど歯ぎしりをした。そして朱里から離れると、背中を向けて深々とため息をついた。

「せ、瀬田？ あの、だから、その、昨日のことは酔った上での過ちとして、なかったことにしよう？ ね？ その方がきつとお互いに仕事しやすいわ」

何やら急激に落ち込んだらしい葵の背中に、朱里は恐る恐る手を伸ばした。そう、勝手な言い分だとしても、なかったことにするのがお互いに一番いい。

だが、朱里の指先が葵の背中に触れる直前、再び彼は深いため息を吐き出した。今度はわざわざらしいほど深く。

「……初めてだったのに」

ぼつり。

眩かれた言葉に指先が止まる。

「……は？」

「だから、初めてだったんです」

ゆっくり振り返った葵の顔には、いかにも悲しげな表情。さっきの言葉と相まって、朱里は溢れてくる嫌な予感に冷や汗が噴き出すのを感じた。

「だ、だから何が初めてだったっていうの？」

すっかり落ち込んだ才をしているが、その目は何かを企んでいるかのようにじつと朱里を窺っている。思わず腰が引けてしまう。いや、腰が抜けたのかもしれない。

まさか、そんな!!

朱里の想像通りなら、この状況をどうしたらいいというのか。

「ま、まさか……えっち、初めて、だったとか？」

「は？」

「まさかねー……って、ええ!? 嘘でしょう!？」

「嘘じゃないですよ。女性と違って証明できないのが残念です」

ぼかん、と開いた口が塞がらない。

まさか、嘘だ。とも思う。けれど「初めて」だったとわざわざ口にするメリットが、葵にあるとは思えない。



再び重々しいため息が聞こえ、少しだけ怒ったような葵の視線が真っ直ぐに向けられる。

——私、どうしたらいいの!?

なんてこと、怖くて聞けずにいると、葵は想像以上に恐ろしい言葉を口にした。

「責任、取っていただけますよね？」

「せ、責任!？」

声が裏返る。心臓が嫌な音を立てて高速で動き出す。眩暈めまいもし出した。いつそのこと気でも失っ  
てしまいたい。けれど残念ながら意識が暗転することはなかった。

そんな朱里に追い打ちをかけるように、葵が言葉を続ける。

「だって考えてみてください。この状況でもしも男女逆だったらどうです？ なかったことにしてくれ、なんてことにはならないでしょう？ 処女奪った上にヤリ逃げなんて、サイテーの男だと思いませんか？」

うん、確かにサイテーだな。

とか、納得している場合ではない。まさに自分が今、そのサイテー男の立場なのだから。

「サイテーですよね？ ねえ、朱里さん」

逃げることを許さない、射るような葵の瞳にひたと捉えられ、朱里はタオルケットを体に巻きつけたままベッドの上で正座した。

「……はい、その通りでございます」

朱里は項垂うなだれたまま肯定するしかない。

「分かっていただけならいいんです」

肩を掴まれ顔を覗きこまれる。その顔には、満足げな笑み。

「と、いうことで、責任を取って僕のものになってくださいね」

「……」

なんだか今、さらりととんでもないことを言われた気がする。

言葉の意味を上手く呑み込めず、朱里は何度も瞬まばたきを繰り返した。頭の中で必死に葵の言葉を反はん芻すする。僕のものになってくださいとは、つまり、なんだ？

「僕のものに……?？」

「はい。責任を取って、僕のものになってくださいね。僕の女になれって言ってるんです」

丁寧な物言いと愛らしいことこの上ない天使のような微笑みで、とんでもないことを言われている気がする。いや、言われたのか。

「ふ、ふざけないで」

「ふざけてませんよ。僕の初めてを奪ったんですから、当然でしょう？」

無垢そうな笑みで、無垢とはかけ離れたことを口にする葵に迫られ、朱里は飛び退くようにして離れた。危うくベッドから転落しそうになったが、彼に腕を引つ張られて助けられる。

「大丈夫ですか？」

いかにも心配そうなその表情にだまされそうになる。

「だ、大丈夫よ!! それよりもあんたの頭の方が大丈夫!？」

掴まれた腕を振りほどきながら、朱里は葵を睨みつけた。

「僕は至ってまともですけど。責任を取ってくれって言ってるだけじゃないですか」

「無理。ムリムリムリ、絶対に無理」

「どうして？」

可愛らしく首を傾げられ、脱力した。

どうしてと言われても。

自分が指導係であることを考えても、年齢のことを考えても、何より昨日今日会ったばかりの相手のものになれと言われて、了解など出来るはずもない。それに……

「もしかして、彼氏が……いたりするんですか？」

その呟きが少しばかり寂しさを含んだものだったことに、動揺しまくっている朱里は気付かなかった。

「彼氏がいるんですか？」

またしてもがっちり肩を掴まれ、迫られる。

「え……っと」

彼氏。その言葉に思い浮かぶ顔がないわけではない。ただ、今でも彼氏と呼んでいいのかわからない。なにしろ「別れよう」という決定的な言葉がないだけで、自然消滅している状態なのだから。

答えに迷っている様子から、葵は「彼氏はいない」と判断したらしい。肩を掴んでいた力が緩み、につこりと微笑みかけられる。

「いないんですね？ だったらいいじゃないですか、大人しく僕のものになっておけば」

むか。

その物言いに、自分の立場が頭から吹っ飛んだ。さつきから人のことをもの扱いして何様のつもりだ。大人しくとはどういうことだ。

「い、いるわよっ。彼氏くらい!!」

考えるよりも先に言葉が飛び出していた。

「もう三年も付き合っている相手がいるの。だから、初めてを奪っちゃったのは申し訳ないと思うけど、瀬田のものにはなれません!!」

「……へえ。名前を教えてくださいますか？」

「は、はあ？ 名前なんて言っただけですよ」

「……言えないんですか？ 彼氏がいるなんて口から出まかせなんじゃないんですか？」

挑発的な態度に、ついむっとしてしまふ。けれど胸を張って彼氏だとは言えず、朱里は一瞬口ごもり、小さな声で答える。

「……清和」

下の名前だけなら大丈夫だろうと、彼の名前を口にする。

「キヨカズ、ね。覚えておきます」

憎き敵の名を知ったかのように、葵は表情を歪ませた。

「あ、あの……覚えなくていいから」

清和の身の危険を感じてそう言うと、葵は朱里を見て大きくため息をついた。

「……彼氏の件は分かりました」

「わ、分かってくれた？」

葵の妙な迫力に押されて声がひっくり返ってしまった。それでも理解してもらえたようで安堵する。

「じゃあ、僕のものになれっていうのは無しにしてあげます」

「そ、そうだね。無理だもん」

相当上からものを言われている気がするものの、これ以上とんでもない要求を突きつけられるのが怖くて突っ込めない。

「じゃあ」

葵は顎に手を当て、笑みの消えた端正な顔でじっと朱里を見つめてくる。数瞬そうやって考えてから、ふっと口元を持ち上げた。さっきの愛らしい笑みとは違う、企みを隠そうともしない危険な笑みだ。

口元は笑っているのに目は少しも笑っていないくて、そのアンバランスさが余計に怖い。

「そうですね、僕のものになれっていうのは諦めます。その代わり……僕の言うことに従ってもらおうかな」

「は？」

「言い方を変えれば、いつでも朱里さんを好きにできるってことです。それにいきなり僕のものに

するより、こっちの方が手に入れる楽しみもあつてやりがいがありますから」

「……は？」

言われている意味がさっぱり分からず、朱里は思い切り眉間にしわを寄せた。無茶苦茶だ。話にならない。

「その、さ。あり得ないでしょ。あんた、おかしいよ」

しかもどうして、それほどまでに朱里に執着するのか。疑問に思ったものの、なんだか自惚れた質問のような気がして口に出さなかった。

「おかしくないですよ。それに朱里さんには選択の余地なんてないんですよ？ 自分の立場、分かっています？」

「そ、それは……でも、やっぱりおかしいじゃない。そんな条件、呑めない」

戸惑いながらもはつきり告げると、葵がため息をつきつつ大きくかぶりを振る。

「分かってくれませんか。呑めないじゃないんですってば。朱里さんは責任を取る義務があるんですから。それとも……」

ぐっと迫ってくる葵の目が、肉食獣が獲物を捕獲する時のように危険な光を宿している。

「病院にばらしましょうか？ 朱里さんに童貞奪われた上に、ヤリ逃げされたんです……って。悲痛な表情で、涙のひとつでも流してみましようか？」

「じよ、冗談はやめて」

「僕の目が冗談を言っているように見えますか？ 見えませんよね？ だって本気ですもん」

言葉の通り、葵の目は冗談を言っているようには見えない。

言葉も出せず、朱里は金魚のように口をパクパクさせた。そんな朱里に葵が追い打ちをかける。

「ヤリ逃げよりもセクハラの方がいいですか？ 朱里さんの信用、一瞬で粉々ですわね」

反論したいのに、反論できない。

確かに記憶がないにしろ、葵とナニしてしまったことは事実のようだし、ヤリ逃げとかセクハラとかそんなつもりはこれっぽっちもないけれど、彼がそうだと訴えてしまえば、そういうことになってしまふのだから。

信用が粉々どころか、そんなことになったら職場にいられない。

そう、これからも平穩無事にあの病院で仕事をするためには、どうやら葵の言うことを聞く以外道はなさそう。

「そんなに青くならなかったって、取って食ったりはしませんよ。あ、すみません。取って食う気満々でした」

はっとした時には、さつきとは打って変わって満足げな笑顔が眼前に迫っていて。それはそれは慣れた手つきでベッドに押し倒され、体に巻いていたタオルケットを奪われた。

「なにす……んぐ」

言葉を発しようとした瞬間に唇を奪われ、半開きだった口内に葵の舌が差し込まれる。くまなく舐めつくすように口内を蹂躪され、舌を吸われる。言葉どころか、呼吸さえも奪われてくらぐらした。その間にも葵の指先は朱里の体をなぞり、その刺激に腰の奥がぞくりとする。体をなぞっていた

大きな手が胸を掬い上げ、その中心をきゅつと摘みあげる。

「ふ、……っあ!!」

親指と人差し指の腹でこねるように押し潰されると、朱里はその久々の感覚に思わず声を上げ、体をびくびくと震わせた。

「……可愛いですわね」

互いの唇を透明な糸で繋げたまま、葵が余裕たつぷりに微笑む。そして再び覆い被さるようになって朱里の唇を奪った。

ちう、と濡れた音を立てて、柔らかく、激しく朱里の口内を愛撫する舌尖。そのキスは思考さえとろりと蕩かしてしまいそうなほどに上手い。朱里の胸を弄ぶ手つきにも焦った様子はなく、女の感じる場所をよく知っているようだ。

余裕な態度、上手すぎるキス、慣れた手つき……

「あ、あんた本当に初めて!? な、なんでこんなに女慣れしてんのよ!!」

与えられる快感に必死に抗いながら、朱里は葵を押し退けた。上目遣いに睨みつけられ、一瞬ひたりと葵がフリーズした。真顔のまま固まり、それから取って付けたように微笑む。

「……いえ。初めてですよ?」

「その間はなんだ!? 瀬田!! あんた初めてなんてウソでしょ!? ……つきや」

葵の体を押し退けていた手は、あっさりとシートに縫い付けられてしまった。見上げた葵の片眉が跳ね上がり、こめかみがピクリと動いたのを朱里は見た。

「僕が初めてと言ったら、初めてなんです。間違いない、初めてなんです」

「初めての奴がそんなに慣れてるはず……ひゃあっ!!」

反論しようとした途端、急に胸の先を強く吸われ、思わず悲鳴に似た声を上げてしまう。

「……いいんですか？」

吸っていた胸の先端を今度は舌先で弾いて、葵が妖しい視線を寄越す。

「ヤリ逃げの噂の他に、変態プレイもおまけしておきましょうか？」

「……っ!!」

「ね？ だから大人しく責任取っておいた方が無難ですよ。その方がお互いに仕事しやすいってものじゃないですか」

「そ、れ……っ、はああ、っん!!」

それ、さっき私が言ったセリフじゃないか!!

と口から出かかったものの、右の胸を指先で、左の胸を唇と舌で再び激しく刺激され、思考は真っ白に塗り潰されてしまった。

するりと葵の指先が朱里の体内に忍び込み、朱里はぐつと息を詰めた。ナカを掻き回されながら、その上の花芯を押し潰すように刺激される。

「……っ、ひゃ」

体を突き抜けるようなその感覚に力が抜ける。葵の指先に翻弄され、そこからは恥ずかしいほどに高く濡れた音が漏れて……

与えられる快感に、全てを支配されてしまう。

「もっと……溺れてください。僕に」

やっぱりそれって、数時間前に童貞捨てた男のセリフじゃないよね？

そんな疑問は、浮かんた瞬間にシャボン玉のようにパチンと弾けて消えてしまった。

体内を翻弄していた指が抜かれたかと思うと、葵自身がそこに押し付けられる。さっきとは比べ物にならない圧迫感に、朱里は唇を噛んでシーツを握りしめた。

「朱里さん」

「あっ、あ、ああ、あ、んっ!!」

膝裏に手をかけるようにして足を持ち上げられ、正面から一気に貫かれる。

頬に<sup>頬</sup>額に唇に……キスが降ってくる。その合間に何度も名前を呼ばれるけれど、激しく突き上げられ、返事もできない。

叩きつけられるように激しく突き上げられたかと思うと、じらされるようにじわじわと攻められる。痛みなのか快感なのか分からない刺激に、朱里はただ喘ぐことしかできない。

繋がっている部分から信じられないほどの熱が体中に広がっていく。熱に浮かされたように、朱里はただ揺さぶられるままに喘いだ。

「やあ……あ、も、もう、だ、めえ……苦し……ゆるして」

「なにを言っているんですか？ まだまだこれからですよ？」

息も絶え絶えに懇願したのに、葵はそれはそれは爽やかににつこりと微笑んで、更なる攻めを宣

言する。

「ちよ……っ、待って、ま……っ、きや、ふ、ああん!!」

強張った朱里の声は、しかし次の瞬間には色っぽい嬌声きょうせいに変えられてしまう。

それからはまさに怒涛どとうの攻めだった……

「……っ、疲れた」

激しい攻めを全身で受け止めざるを得なかった朱里は、ぐったりと疲れ果てて裸のままベッドに突っ伏していた。

少しすると汗が引き始め、体がぶるりと震える。その体にふわりとタオルケットがかけられた。

「大丈夫ですか？ 体冷やさないでくださいね。女の人は体を冷やしちゃダメです。そのうち僕の子供を産んでもらう、大事な大事な体なんですから」

「……」

なんだか突っ込みどころ満載な気がするものの、突っ込みものなら更に仰天発言をされそうで、朱里は何も聞かなかったことにする。

代わりに、服を身につけている葵を横目で眺めつつふと気になったことを口にした。

「瀬田、そういえばあんた、何歳なの？」

「僕ですか？ 二十一ですけど」

ああ、なるほど。それでさっきあれだけ動いたのに、こんなに元気なんだー。

とか納得している場合ではない。まさか自分よりも六歳も年下とは。眩暈めまいがする。

「あのさ、瀬田くらしいの見え目だったら、別に私のことどうにかしなくたって、よりどりみどりで、選びたい放題じゃないの？」

朱里としては、至極もつともなことを言っただつちもりだった。

けれど葵はシャツのボタンをはめていた手を止め、呆れたような顔で朱里の髪をわしゃわしゃと掻きまぜた。

「や、なにすんの？」

「バカなことを言わないでください。僕は決めたんですから」

「決めたって、なにをよっ」

乱された髪の毛の間から葵を覗みつける。覗みつけた、つもりだったのに……

柔らかな、優しい笑顔に出会い、刹那せつな、目も心も奪われる。

「朱里さんを泣かせるって、決めたんです」

「……っ!! な、なにそれ!!」

はっと我に返って頭に置かれたままの葵の手を振り払う。心臓がドキドキしているのは、単に驚いたからだ。間違いない。

「今日のところは退散しますね。朱里さんも疲れたでしょう？ 月曜日からご指導よろしくお願いします。朱里先輩」

「……」

悪戯いたづらっぽく笑って、葵はシャツのボタンを中途半端に留めたまま玄関に向かう。

「ちょっと、その恰好で外に出るつもり？」

「はい。すぐそこですから。じゃあ」

「あ……っ」

制止する暇もなく、さつさと葵は出ていってしまった。コツコツと靴音が遠ざかっていく。

……と思ったら、階下の部屋のドアが開閉する音が朱里の耳に届いた。そこは、つい最近まで空室だったような……

「ま、まさか……すぐそこって、この部屋の下？」

呆気にとられ、開いた口が塞がらない朱里だった。

## 2 逃がしません、絶対に。

病棟へ向かう階段を上る足取りが重い。

朱里はもう何度目になるか分からないため息を吐き出した。

月曜日の朝だというのに、これっぽっちもやる気が湧いてこない……というか、これから仕事だというのにあの瀬田葵とどんな顔で会えばいいのか分からない。

階段を上りつつ、朱里は無意識に腰をさすっていた。

散々攻められたせいで、全身筋肉痛に苦しめられたのだ。土日二日間の休みがなかったら、到底仕事にならなかつただろう。

「どうしたんですか？ 体が痛むんですか？」

階段の下の方から突然声をかけられ、朱里は文字通り飛び上がった。その拍子に腰がずきりと痛む。

「おはようございます、朱里さん」

「瀬田……」

いまだ体中に筋肉痛の残る朱里のしかめっ面とは対照的に、葵の顔はこの上なく爽やかだ。肌なんてつやつやで羨ましい。階段を駆け上がってくる身のこなしも軽い。

ああ、若いってすごいなあ……

つい、素直に感心してしまう。

だがそんな心の内は押し隠して、朱里は隣に並んでにっこりと微笑みかけてくる葵を睨みつけた。どんな顔をすればいいのかと思いついていたが、その笑顔を見てしまうとやはり憎らしさが湧いてくる。

けれど動揺していると思われるのも癪で、朱里はすぐに何事もなかったかのように無表情を装った。

「……おはよう、瀬田」

その素っ気ない態度に、葵は一瞬目を見開いた。そして口元を歪めるようにして笑う。

「なんだ、もう少し動揺してくれると思っただんですけどね。つまらないなあ」

どうやら悔しがっている葵の様子に、動揺しきりだった朱里としては少しだけ気分がいい。にまついてしまいうるような口元を必死に引きしめながら、引き続き平静を装う。

「動揺なんてするはずないじゃない。仕事は仕事、プライベートはプライベート。瀬田もそこら辺はしっかり区別してよね。私たちは人様の命を預かっているんだから、責任感を持って真剣に仕事をしなくちゃいけないの。中途半端は許されないよ」

偉そうに言うてから、朱里はしまったと思った。

土曜日の件があるのだ。童貞奪われたのだ、セクハラだの言いふらすと脅してきた相手に、いきなり説教はまずい気がする。間違ったことを言うつもりはないけれど、相手は自分の言うことに従えなんてハチャメチャな要求を突きつけてくる奴なのだ。

隣に並んで階段を上る葵を怖々見上げた朱里は、彼の表情を見て思わず足を止めた。

真っ直ぐに朱里に視線を寄越す葵は、予想に反して柔らかな表情で微笑んでいたから。

綺麗な、優しい表情で。

「はい。仕事に私生活は持ち込みませんよ。だからビシビシしごいてくださいね」

「……っ、わ、分かった。ビシビシしごくから、覚悟してよね」

「はっ」

しごくと言っているのに、葵は最高の褒め言葉でも貰ったかのように、嬉しそうに顔を綻ばせた。こいつ、しごかれるのが好きなの？ マゾ？

変な奴。もしかして、しごくって意味、勘違いしてないよね？ それは勘弁して……

と、浮かんだ考えにげんりしながら、朱里はさっき完全に葵の表情に魅了してしまったのを誤魔化すように、顔を逸らした。ずんずんと階段を上ると、最後の一段のところ腰に激痛が走り、そのまま動けなくなってしまう。

「朱里さん」

葵が軽い身のこなしで駆け寄り、いかにも心配そうな様子でそっと耳元で囁いた。

「大丈夫ですか？ これくらいで音を上げられたら困りますよ。でも……まあ、回数をこなせばきつと体も慣れてきますね」

「っ!!」

「僕も頑張りますから」



なにを頑張るっていうんだ、なにを!! 多分それ、頑張られると困るから!! とはもちろん口に出すことはできず、腰に手を当てた無様な格好で朱里は石のように固まる。そして、鼻歌交じりにナースステーションに消えていく葵の背中を見送るのだった。

「ねえねえ、瀬田君はどうして看護師になろうと思ったの?」

「少しでも病気の方のお役に立ちたいと思ったからです」

「看護学校の時、男子生徒って何人くらいいたの?」

「僕を含めて三人です」

「だったらもてたでしょ!？」

「そんなことないですよ……僕なんて」

「うそー!! 絶対にもてたはずだよ。瀬田君が気が付いてないだけだってば!!」

ナースステーション内の看護師休憩室は、わきやわきやとピンク色の空気に包まれていた。看護師たちのメイクにいつもより気合が入っているように見えるのは、きっと気のせいではない。

最近では男性看護師も増えてきているものの、まだ圧倒的に女性看護師の方が多い。この外科病棟も、男性看護師は今回入ってきた葵のみ。しかもその容姿はアイドルかモデルと言っても通用するほど。メイクに気合が入っても不思議ではない。

っていうか、師長までいつもより綺麗になっている気がするんですけど……

そんな気合の入った看護師たちが、次々に葵に質問を浴びせかけているのだ。

そして質問は、どんどん葵のプライベートを探っていく。

「瀬田君はどこに住んでるの?」

「大通りを北に行った、ドラッグストアとかホームセンターとかの集まっている辺りです」

「あの辺りは便利でしょ? 一人暮らし用の物件も多いしね」

「はい。不動産の人に連れていってもらって、すぐに決めました」

「私も今度そちに引っ越そうかなー」

「ぜひ。便利です」

「ねえねえ、ところで瀬田君は彼女とか……いるの?」

そんな質問に、その場の全員が息を呑む。……もちろん、朱里以外。

「いませんよ。僕、そういうの苦手で……」

苦手!? 嘘をつくな!! がっつり肉食系のくせに!!

内心で吠えまくる朱里とは対照的に、その場にいた看護師たちは目を輝かせた。「可愛い」とか「草食系なんだね」とか囁ささやいている。すっかり騙だまされている一同に、

「騙されるな!! そいつは草食動物の仮面を被った危険極まりない肉食獣なんだ!!」

と叫びたくなかったが、朱里は必死に我慢した。

そんなことを叫べば、知られたくない事実まで明るみに出てしまう。

「えー、じゃあ、瀬田君はもしかして女の人自体苦手なの?」

その質問に葵はにっこりと微笑んだ。その笑顔の可愛らしいことと言ったら……肉食獣どころか、

まるで天使。

「少し……でも、先輩方は皆さんとても優しそうですね、ほっとしました」

数人の看護師が、ぼつと頬を赤らめるのを朱里は見逃さなかった。

……撃ち抜かれたな。

ズキーン、とハートを撃ち抜かれた音が聞こえた気がする。

それから、「好きな食べ物は」とか「趣味は」とか、始業時間ぎりぎりまで葵への質問攻撃は続いた。その質問の全てに葵ははにかみながらも丁寧に答えていて……自分と二人の時とは全く違うその態度には、呆れを通り越して感心してしまう。

こんなふうになく違ふ顔を見せられたら、どちらが本当の瀬田葵なのか分からなくなってしまう。ここまで人格を使い分けられるなら、看護師よりも役者向きじゃないかと本気で思った。

始業時間となり、名残惜しそうに葵の周囲から看護師たちが離れていく。それを見計らって朱里は仕事の説明を始めようと葵のそばに歩み寄った。

だがとりあえず説明の前に、嫌味をひとつお見舞いする。

「誰が草食？ あんたが草食なら、世の男子は全員草食系よ」

「僕は何も言ってませんよ。皆さんがそう判断してくれたただけですから。僕が草食系じゃないってことを含めて、先日のことをすべて皆さんに説明してくださって結構ですよ」

「……仕事の説明するわ」

嫌味をお見舞いしたつもりが、カウンター攻撃を喰らってしまった。なにを言ってもドツボには

まる気がして、朱里は頭を仕事モードに切り替えることにした。

まずは受け持ち部屋の確認をし、担当患者の処置や検査の予定を確認し、それから夜勤が変わったことはないか、看護記録で確認するといった最初の流れを説明する。説明の間、葵は「はい、はい」と言いながらメモを取ったりして真剣に聞き入っていた。

……調子が狂う。

真剣そのものの葵の態度に朱里の方が戸惑ってしまつて。

いやいや、仕事とプライベートをしっかりと区別しなさいって言ったのは私の方じゃないの……しつかりしろ、私!!

戸惑いつぱなしの自分の気持ちを振り払うように、朱里は大きく首を振る。どんな男だろうと、教育係を引き受けた以上朱里は葵を一人前に育てる責任がある。与えられた責任はきっちり果たさないと気持ちが悪い。

「と、こういうこと」

そう言つて朱里はひとつ咳払いをする。

「まずは処置の拾い出しをしてみよう。これがしつかりできないと、動きようがないからね」

そう言つて朱里はパソコン画面を表示する。そこにはその日に行う処置から内服薬、食事内容に至るまで細かな情報が示されている。

「分かりました」

言われたとおりに葵が処置の拾い出しを始めるのを確認して、朱里は受け持ち部屋の点滴の準備

にかかるとにした。

「ねえ、寺岡は？」

自分の勤務終了時に次の勤務の看護師に患者の様子を伝える「申し送り」の時間になっても、夜勤の看護師の一人が戻らず、日勤のチームリーダーが他の夜勤の看護師に声をかけていた。

「あ、ええっと、寺岡なら大久保さんのところだと思えますが……」

「大久保さんか……日勤の受け持ちは……朱里さん、ですね」

ナースステーション内にいる他のスタッフたちの視線が、一斉に朱里に集中する。その瞳にはあからさまな同情の色が浮かんでいる。

「……寺岡と交代してきます」

朱里はため息をかみ殺しつつ、足早にナースステーションを出た。

大久保夫人は二年前に大腸の手術をしてから、年に二回ほど検査のために短期で入院してくるご婦人だ。そのためこの看護師たちとも顔馴染みではあるが、入院の度に検査薬がまずいだの量が多いのだと、看護師を捕まえては文句を言っただけで離さないため厄介な存在でもあるのだ。きつとそうやって検査のストレスを発散しているのだろうけれど、時間に追われる身としては、長時間の拘束は厳しい。

病室前に着くと、朱里は大きく息を吐き出し精一杯の笑顔を作る。四人部屋の一角で、案の定寺岡が大久保夫人に捕まっていた。

「おはようございます。あ、寺岡さん、リーダーに夜勤の申し送りをお願いします」

朱里の出現にほっとした表情を隠すこともなく、寺岡は「すみません」と頭を下げて逃げるようにその場を去っていった。それを見届けた朱里は、笑顔のまま大久保夫人のベッドサイドにしゃがみこむ。

「大久保さん、何かありました？」

立ったままで対応しない。

これは朱里がどんなに忙しくても心がけているマイルール。しゃがむ余裕もない看護師に、話を聞いてほしいという患者さんはいないはずだから。

視線を合わせて訊ねると、大久保夫人はいかにも不満そうにベッドサイドのボトルを指差す。

「萩原さん、今日はあなたが担当？　ねえ、これ。半年前に来た時と全然変わってないじゃないの。前の検査入院の時に、この味をどうにかしてくれてあげればよかったのに」

大久保夫人が言っているのは、大腸カメラの際に飲む水溶性の下剤のことだ。ニリットルという量のポトルは、持っていくと誰もが顔を引きつらせる。しかもまずい。大久保夫人は入院の度に、この下剤について文句を言わなければ気が済まないらしい。

「ねえ、そう思うわよねえ」

「そうねえ、確かに美味しくないわねえ」

しかも今回は、同じ検査を受ける同室の患者まで巻き込んでいる。

「ほら萩原さん、こっちの奥さんだつてまずいって言ってるでしょ？　こんなまずいもの、無理よ」

「でもそれを飲んでいただかないと、検査になりませんから」

「まあっ、萩原さんはこれがどれだけまずいか知らないからそんなこと言えるのよっ」

朱里は小さくため息をつくど、すくっと立ち上がった。言葉でどれだけ訴えたところで、こういうタイプは納得してくれない。

「ちよっと萩原さん、どこ行くのよ!? まだ話は終わってないんだから!!」  
「少々お待ちくださいいね」

病室を出ていこうとする朱里を、咎めるように呼びとめる夫人を振り返ってにっこり微笑む。そしてひとまずナースステーションに向かった。

「あ、朱里さん」

拾い出しを終えたらしい葵が駆け寄ってきたものの、それに構わず尿検査用の紙コップをわしつと掴んで、再び大久保夫人の病室に向かう。葵もその後を追ってきた。

病室に戻った朱里は、大久保夫人の下剤を紙コップに注ぐと一気に飲み干した。その様子を見て、夫人も、後を追ってきた葵もあんぐりと口を開ける。

「んーっ、確かにまずいっ」

「……で、でしょうか?」

驚いていた大久保夫人は、それでも何度もうなずきながらそう言った。

「確かにこれを飲むのは骨が折れそうですね。でもこれお薬なんで、看護師の私たちじゃどうにもできないんです。でもどれだけでもまずいかはよおおつく分かりましたので、何か工夫できないか、薬剤師にも相談してみますね」

「え、ええ。そうしてちょうだい」

そう、言葉で説明してダメなら態度で示して気持ちを共有する。本当の意味で共有できたかどうかは別として、何もしないよりもましだと朱里は思う。

「なので、今回は申し訳ありませんが、この薬を飲んでいただけると助かります」

ぐっと大久保夫人の手を握りしめると、さっきまで驚きに見開かれていた夫人の目が、何かを見透かすようにすっと細められた。

「萩原さん、まずいのを分かっていただけのは嬉しいんだけど、まずいものはまずいんだもの。

飲むのは嫌だわ。ねえ、奥さん」

「そうねえ、分かってもらえたのは嬉しいけれど、だからって飲めるかって言ったら……ねえ」

他の患者さんも巻き込んで、「無理よねえ」とうなずき合う様子に、朱里はがっくりと肩を落とした。気持ちを共有できたからといって、問題が解決するわけではないのだ。

「ええい!! つべこべ言わずに飲んでください!! 検査するの初めてじゃないんだから、この下剤を飲まなきゃならないことは前から分かっていたでしょ!」

……と、襟首締め上げたいのをぐっとこらえて笑顔を崩さない朱里。

しかし大久保夫人は、

「どうかかして」

と迫ってくる。

どうかかしてもらいたいのは朱里の方だ。この理不尽な要求をどうしよう。医師に相談したから

とって、下剤が免除になるはずもない。医師からも「どうにかしろ」と言われ、板挟みになるのがオチ。

「どうにかしろと言われましても……」

「まずいのは、萩原さんだつて身をもって知つたでしょう?」

「そ、それは確かに……」

「頑張つて下剤を飲んで気持ちを共有したというのに、裏目に出してしまった。」

「あの……ちよつといいですか?」

「にっこり。」

黙つて事の成り行きを見守つていた葵が口を挟んでくる。そういえばついてきてたっけ。存在自体忘れていたけど。

「大久保さん、初めまして。僕は瀬田といいます。実は先日配属されたばかりで、今は萩原さんの助手のようなものなんです」

「あ、あら。そうなの? 新人さんなの」

ベッドサイドにしゃがみこんだ葵が微笑みかけると、大久保夫人はさつきまでの勢いはどこへやら、急に居住まいを正した。

「そうなんです。新人なんです。その下剤、お口に合わないようですね」

「そうなのよ。本当に飲むのが辛くつて、困っちゃうわ」

話す口調もさつきまで朱里に向けていたものとは明らかに違い、かなりマイルドになっている。

頬だつて、ほんのり赤いのは気のせいじゃない。

葵の天使の微笑みと上目遣いに、完璧に取り込まれている。

瀬田葵……恐るべし!!

熟女を手玉に取る葵の姿は、朱里にはもはや悪魔にしか見えない。

「それは本当にお辛いですね。もしよろしかったら、僕とお話しながら少しずつ飲んでみませんか? 気を紛らわせていけば、少しは飲めるかもしれませんよ」

葵は更に笑みを深めて、夫人の顔を下から覗きこむ。

「……なんだかホストクラブで、ホストが奥様にお酒を勧めているように見えてしまうんですが。というか、そんな手にこの大久保さんが引つかかる?」

「まあっ、それなら少しは気が紛れそうだわ!! 萩原さん、瀬田君借りてもいいかしら?」

引つかかっているし!!

さつきまでの不機嫌そうな表情はどこへやら。不機嫌どころか上機嫌で大久保夫人が朱里を見る。下剤を飲んでもらえるならそれに越したことはない。けれどこの場を新人の葵一人に任せていいものか悩む。そんな朱里の気持ちを見透かしたように、葵が耳元で囁いた。

「大丈夫ですよ、朱里さん。まだ点滴にも行けてないじゃないですか。今のうちに回つてきてください」

「ども……」

なおも戸惑う朱里の手から紙コップを奪うと、葵はそれを大久保夫人に差し出す。

「ほんの少し入れていただけますか？ 僕だけ飲まないのはずるいでもんね。そちらの方からもちよつとずつ頂いて、一緒に飲みます。萩原さん、少しなら頂いても検査に支障ないですよね？」

「ま、まあ、大丈夫だと思っけど」

「じゃあ、決まりですね」

「ちよ……」

朱里が声をかける間もなく、葵はさつさと検査用の下剤を紙コップに注いでもらっている。二人分なので、少しといつても紙コップ半分近くになった。

「じゃあ、乾杯ー」

葵は勝手に病室に備え付けられている丸椅子に腰かけ、検査のご婦人たちのコップに自分の紙コップをぶつける。

「じゃ、せえの、で一緒に飲みませんか？」

せえの、とか言いながら、患者さんも葵につられて下剤を飲んでる。しかもちよつと楽しそうだ。……なんだか少し感心してしまう。

確かにお酒を勧めるホストに見えるものの、朱里ではこんなふうな気持ちよく下剤を飲んでもらうことはできなかっただろう。

経験年数を重ねたことや忙しさで、要領よく済ませることばかり考えている自分がいる。

本当に必要なのは、葵のようにただ単純に患者さんのそばにいて寄り添うことなのかもしれない。なんだか自分に足りないものを思い知らされてしまった。

葵がちらりと視線を寄越し、小さくうなずく。それにうなずき返し、朱里はまだ何も手をつけていない処置の数々をこなすことにした。

「朱里さーん」

「瀬田」

葵が戻ってきたのは、それから三十分ほどしてからだ。

朱里は空になった点滴ボトルやら注射器を片付ける手を止め、葵に駆け寄った。そんな朱里に向かって、彼がにっこりと微笑む。

「全部飲んでもらえましたよ」

そう言いながら葵は、手に持った空のボトルを朱里に見せる。

全部飲んでもらったことは喜ばしい。けれど、それよりも……

「瀬田、あんた顔色が悪い。ねえ、もしかしてあれから更に下剤を飲んだんじゃないか……」

「えと、三杯ほど」

「だ、大丈夫!？」

思わず両肩を掴んで顔を覗きこむ。

見上げた葵の顔は、光の加減なんかじゃなく本当に少し青くて。朱里は本気で心配したのだが、当の葵は驚いた顔をした後、照れ臭そうに微笑んだ。

「……朱里さんに心配してもらえるなんて、嬉しいです」

「な、なに呑気なこと言ってるの……」

下剤を三杯も飲んで青い顔をしているのにな、どうしてこんなに嬉しそうにするんだろう。

朱里は少しだけ呆れつつも、小さく嘖き出した。

「腹痛でぶっ倒れたら、朱里さん、看病してくれますか？」

こそっと耳元で囁かれ、朱里は口の端を持ち上げてにっと笑う。

「倒れないから。倒れるようなものだったら、そもそも検査に使用しないでしょ？」

「ああ、確かに……そうか、残念です」

がっくりと項垂れるその姿が、本気なのかおどけているのか朱里には判断しかねる。もっともこの瀬田葵という男自体、朱里にはよく分からないのだけだ。

それはともかく朱里は先程、葵に助けられたのだ。

「……瀬田」

「はい？」

「さっきはありがと。助かった」

笑顔を向けると、葵は何とも表現しがたい顔で朱里を見ていた。そう、喜んでいるような、驚いているような、泣きたいような、笑いたいような……そんな複雑な表情で。

「僕、朱里さんのお役に立てたんですか？」

「うん、ありがとだね。助かったよ」

「……やべ、今すぐ抱きしめてえ……」

「え？ 何か言った？」

「……いいえ。なんでもないです」

「そう？ じゃあ、お部屋回りに行こうか。日勤の検温は体温と脈拍、それに血圧も測るから血圧計持ってね」

「了解です」

葵の返事にうなずいて、朱里は中途半端になっていた片付けを再開する。

葵が静かな、けれどはつきりと熱を孕む瞳で、見つめていることも知らずに。

「朱里さん、やっぱり仕事の後はビールですよね」

「……」

「今日はお疲れさまでした」

朱里の目の前に、ビールの入ったグラスが差し出される。ビールは好きだし、仕事の後の一杯は魂に沁みる。生き返る。ビールを受け取ることに何ら問題はないのだ。問題があるとすれば。

「瀬田？ なんであなたが我が物顔で私の部屋に上がり込んで寛いでんのよ」

そう、問題はこの後輩。

今日一日の仕事を終えてやっと帰宅した朱里はつい十分程前、治安の良い地方都市ということもあり、すっかり油断してチャイムの音に玄関を開けてしまったのだ。そこに、するりと入りこんできたのが葵だった。

「ほらほら、怒ったら余計に疲れますよ？ それにしても随分遅かったんですね。もしかして僕のせいで、仕事が押していたんじゃないですか？」

うーん……鋭いな。

確かに葵の言う通りだった。色々教えながら自分の仕事をしていたので、思った以上にはかどらなかつたのだ。けれどそれは朱里の問題だし、葵に言うべきことではない。

「別に。看護記録に時間がかかっただけ。瀬田にも明日から少しずつ書いてもらうから、書き方がちゃんと見ておいてよ。患者さんの状態の把握もしっかりとね」

「はいはい。まずは一杯どうぞ」

「あんた、適当に返事してるでしょう？ 看護記録は全員で共有するから重要なんだよ」

アルコールの誘惑に負けてグラスを受け取りつつも、朱里は少々説教臭い口調でそう言った。対する葵はにっこりと笑みを浮かべたまま、朱里をじっと見ている。

「瀬田、人の話を聞いて……」

つい職場と同じつもりで話していた朱里は、次の瞬間、目の前の葵の表情に息をするのも忘れてしまう。

だってそこにあつたのは、職場での従順そうな顔ではなく、先日朱里に責任を取れと迫った、あの肉食獣を彷彿ほうふつとさせるそれだったから。

「朱里さん」

すいっと迫られて、朱里は息を呑んで距離をとる。

更に迫られ、逃げるように再び距離をとろうとした——が、グラスを持っていない方の手首を掴まれてしまった。

「朱里さん」

「な、なにっ？」

みっともないくらいに声が裏返ってしまう。

「明日のことはよく分かりました。でもここはもう病院じゃないんです。だから今は朱里さんは僕の指導係じゃないんです。ほらやっぱり、仕事とプライベートはしっかり区別しないと、ね？」  
射るような瞳に思わずたじろぐ。危険を絵に描いたようなその目に、どう対処していいか分からなくて。

まずい雰囲気になりつつあるのを感じ、朱里は慌てて別の話題を探した。

「あ、そ、そうだ。瀬田、お腹は？ 下剤飲んでお腹は大丈夫だったの？」

「え？ ああ、大丈夫ですよ」

葵は一瞬きよんとしたものの、にっこり笑った。どうやら話を逸らすことができたようだ。朱里はほっとしてグラスを口に運んだものの、大好きなビールの味はなんだかよく分からなかった。

「さすがに多少はゴロゴロしましたけど、平気です」

「そう、それならいいけど、無理したもんだわね」

検査用の下剤を三杯だなんて、トイレと仲良しになる確率も高い。確かに朱里だって飲みはしたが、味見程度の量だったから。



「僕は朱里さんの真似をしただけです。颯爽と検尿用の紙コップで下剤を飲み干す姿は、見惚れるほど恰好よかったですよ」

それ、あんまり格好良くない気がする……  
とは、あえて言わない。

「それに朱里さんのお役に立てるなら、あんなことくらいどうってことないんです」

と当たり前のように言い切って、葵はやほりにっこりとする。視線を逸らすことなくじつと朱里を見つめる葵の瞳。その真っ直ぐさが少しだけ怖い。

だからビールを口に運ぶふりをして、葵からそっと目を逸らした。

「……その、もうあんな無理、しちゃダメだよ。確かに助かったけど、看護師は体力勝負なんだから」  
「分かりました」

「うん、分かってくれたならいい」

「でも」

「え？」

「でも、朱里さんのためだったら、僕はどんな無理だって平気です。喜んでどんな無理でもします」

「な、なにを言ってる……」

「朱里さん」

はっとした時にはもう、葵の整った顔が眼前に迫っていて。押し退けることすらできないまま、二人の唇は柔らかく触れ合っていた。

するり、と葵の舌先が朱里の唇を割り、体が竦んだ。その拍子に朱里のグラスからビールがこぼれる。

「ひゃあっ」

「うわっ」

こぼれたビールが二人のジーンズを濡らし、慌てたように葵は朱里から離れた。

「ご、ごめん瀬田。大丈夫？」

「大丈夫です。ちよつと濡れただけですから」

葵にティッシュを突きつけつつ、自分もジーンズをティッシュで拭いながらも、動揺しまくっている朱里は思わず声を荒らげた。

「あ、あんたが悪いのよっ、急にキスしたりするから」

「じゃあ今度からは、きちんと確認を取ってからキスしますね」

「そういうことじゃない!!」

頭に血が上って、更に大きな声を出してしまう。

「キスって誰にでもするもんじゃないでしょ？ 何を血迷って私にキスなんかしてんの!!」

つい数日前に出会ったばかりで、単なる指導係と新人という間柄、あとは酔った勢いで一夜を共にしただけ。こんなふうにキスされたり、体を張られたりする覚えはない。

なのに。

「キスします」

「は!？」

両頬をがっちり挟みこまれ、宣言通りに葵が覆い被さってきた。

なにが起こっているのか理解する暇もなく、舌を絡め取られ、吸われ、酸素ごと奪われる。抵抗の言葉さえ唾液と共に呑み下され、朱里は葵を押し退けようと必死に彼の胸を押す。

けれど、葵の体はびくともしないどころか、朱里の方が逃れようとするあまり不安定な姿勢になってしまい、そのままバランスを崩してあっさりと押し倒されてしまった。

まるで自分から倒れ込んだかのように。

「あれ、朱里さん。自分から横になるなんて積極的だなあ」

「ち、違う!! これは不可抗力で……って、やめっ、やめてったら……っ」

葵は朱里の両手首を押さえこみ、唇だけでなく顔中にキスを降らせる。

「や、やめなさい……!! ひゃ、あ」

さっきまで散々酸素を奪われていた朱里の抵抗は弱々しい。それでも必死に抵抗をしていたら、葵がさつきと同じように、「キスします」と言っただけで唇に触れるだけのキスをした。

そのキスは、荒々しさの欠片かけらもない、労わるような優しいキスで。

「キスが誰にでもするものじゃないなら、なおさら僕は朱里さんにキスします。嫌がられたって怒られたって、何度でも……何百回でも僕は朱里さんにキスしますよ?」

少しだけ怒ったような葵の顔。

切なげに寄せられた眉の下で、その瞳は強い光を放っている。

切羽詰まったようなその表情に、朱里は抵抗を止めて問いかける。

「……だから、どうしてそうなるの? 訳が分からない」

やっと絞り出された朱里の声に、やはり葵は苦しそうな顔のまま、それでも口元に笑みを浮かべる。そして朱里の前髪をよけると、額にそっと唇を押し当てた。

「訳が分からなくなっちゃっていいんです。僕がそう決めたんですから。そうしたいんですから」

朱里の頬を撫でていた指先が名残惜しそうに離れ、葵自身も身を起こして彼女から離れる。  
「それに」

床に倒れたままの朱里に手を差し伸べながら微笑む顔には、さっきまでの苦しげな色はもうない。

「朱里さんが拒むことはできませんからね。責任、しっかりと取ってもらわないといけないんですから。セクハラだなんて言いふらされたら困るでしょ?」

「それは……困る」

「僕も困ります。そんなことになったら指導係がいなくなっちゃいますから」

葵の要求を拒絶したのに、拒みきれない。

セクハラだと言いつらされたら困る、というのも確かに理由のひとつだ。

けれど、それだけじゃない。

どうして葵がこんなに自分にこだわるのか、朱里はそれが知りたいと思った。

——お前には俺なんか必要ないだろ? 一人でも大丈夫なんだろう?

ずっと一緒にいるんだと思っていた人は、そうやって別れの言葉さえくれず朱里のもとを離れていってしまった。

けれど朱里は知っている。朱里が彼を必要としていないのではなく、彼の方が朱里を必要としなくなったということ。

「僕には朱里さんが必要なんです」

私のなが必要だつていうの？ 彼にさえ、必要とされなくなった私のなが……？

そんな女々しい疑問は口には出さない。

目の前に葵の手が差し伸べられている。その手を掴んでしまうと、せつかく呑み込んだ疑問が口から飛び出してしまいそうな気がして、朱里は彼の手を払いのけた。

「自分で起き上がれる。年寄り扱いしないでくれます？」

何事もなかったかのように起き上がり、炭酸の抜けかけたビールを口にした。

「意地っ張りですね」

「別にそんなんじゃないから」

「でも、そういうところも可愛いです」

「……黙れ」

「お注ぎしますよ、朱里先輩」

くすくすと笑い声を漏らし、葵がグラスにビールを注いだ。

ああ、もう!! すっかり瀬田のペースじゃないのよ……

ため息をつきつつ、注ぎ足されたビールを口に運ぶ。

どうやらプライベートで主導権を取るの、相当困難を極めそうだ。

次の日の夜。

主導権を取るどころか、葵にすっかり組み敷かれている朱里がいた。

昨夜、どうして葵が自分にこだわるのか知りたいと思ったことを早くも後悔する。

「ちよ……っ、やめ、だ、だめ。お願い、だからあつ!!」

「朱里さんのお願いで、こればかりは聞けません」

昨日の「必要」って、私の肉体が必要って意味だったのか!!

と、思い切り抵抗したいのにできない。セクハラだとか言いふらされたら困るといいうのも一因。けれどそれ以上に、次々と感じる場所を攻められ、力が入らない。

「あ、ん、ひゃ……んっ」

ショーツの間から忍び込んだ葵の長い指先が、執拗に朱里の秘所をぬるぬるとなぞっている。

あまりにも刺激が強すぎて、さつきから瞼の裏でちかちかと火花が散っているほど。息が上がって、体が勝手にびくびく跳ねる。

指導二日目、看護記録を書かせると言っただけであつたにもかかわらず、葵は患者さんの情報収集をし忘れ、朝から朱里にこっぴどく叱られたのだ。他の看護師たちが気の毒そうに彼を見ていたけれど、